

里地通信 2001・4

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋YKビル6階(財)水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：http://member.nifty.ne.jp/satochi/

里地ネットワーク 第4期目を迎えて

事務局長 竹田純一

里地ネットワークは、平成13年2月25日で満三歳となり、平成13年度は、四年度目になります。設立時よりご支援いただいた多くの皆様に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

さて、設立当初より設けさせていただいておりました会員制度についてですが、設立時点では、会費により事務局の基盤を強固なものとしてゆこうという目的で、企業、団体、NGO、個人という会員区分を設け、これに応じた年会費の金額を、上限10万円の団体会員から5千円の個人会員まで、年会費の額に差を設けておりました。しかしながら、さまざまな会員の方からの事務局への要望や事業開発等の依頼を受けておきますと、この会費制度と会員、事務局との関係性という点で、会員区分を設けること自体に格段の意味を置きにくくなってまいりました。また、設立時点の目的であった事務局運営の財政的な事情は、いくつもの委託事業や書籍の販売等を通じて安定的なものとなってまいりました。

そこで、第四期を迎えるにあたりまして、企業、自治体、団体、NGO等の会費を、個人会員と同額の資料の送付代金程度に抑えさせていただくこととなりました。今後、私たちの活動が、限られた一部の先進地域だけができる活動という評価から、全国の里地において、どこでも、半歩進む勇気があればできる運動へと転換させていきたいと思っております。

企業を取り巻く経済環境、地方自治体における財政事業、各種団体、NGOにおける運営状況、個人の研究者や農家の方々と、これらの区分を設けず、一律、里地通信、及び、当年度に作成した書籍や資料の配布代金を年会費(5千円)

とする制度への改定です、皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。併せて、多くの方に、ご紹介いただければ幸いです。(16ページに申込書があります)

新規会員登録について

従来より会員としてご登録いただいていた会員の方とは別に、新規にご入会いただく場合の制度を一部新設させていただきます。新規入会の場合、設立以来おこなってきましたさまざまなセミナーや事業等に関する資料を、新規入会登録時に送付させていただくために、新規登録料を3千円とさせていただきます。これによりまして、入会時には、里地セミナー報告集、グリーンレター、テキスト里地、環境保全型技術集、その他パンフレットを一式送付することとなります。

平成12年度事業報告について

平成12年度は、以下の事業を実施しました。詳細は各報告集、書籍及び、ホームページをごらんいただければ幸いです。

トキプロジェクト：「共生と循環の地域社会づくりモデル事業(佐渡地域)」環境省自然保護局
循環型社会調査事業：物質循環活動促進ネットワークシステム(環境省廃棄物リサイクル対策部)(廃棄物の減量化とリサイクルの促進に関する先進事例調査、及び、ネットワークシステムの構築)
イオン里地里山保全活動(全国8箇所での保全活動の実施)
地域新・省エネルギービジョン策定事業のサポート
地球環境大学の開催にかかわる委託事業(環境事業団)

その他、地元学、フィールド調査、計画づくり等のサポート事業

平成12年度中に策定した書籍、報告集など

「みなまたの歩き方」(合同出版)
「環境保全型技術集・里地からのチャレンジ100事例集」
及び、データベース検索システム
「循環・共生の旅」
(日刊工業新聞、雑誌「グリーンジャーナル」抜刷版)
「グリーンレター」(富士写真グリーンファンド)
「トキシシンポジウム報告集(平成12年11月実施分)」
「里地里山で遊ぼう!」保全活動ノウハウ集VOL.1

近々に完成するもの

「里地セミナー報告集」
「廃棄物の減量化、リサイクルの促進優良事例集」
及び、データベース検索システム
「建築再生 古い建造物の生かし方、優良事例集」
(現在調査中)

平成13年度、四年度目の事業計画について
本年度は、昨年度に引き続き、以下の事業を行います。
トキプロジェクト:「共生と循環の地域社会づくりモデル事業(佐渡地域)」環境省自然保護局
イオン里地里山保全活動(全国8箇所での保全活動の実施)
地域新・省エネルギービジョン策定事業のサポート
その他、地元学、フィールド調査、計画づくり等のサポート事業

新たに会員になられた方へ

(次回送付させていただきます「里地セミナー報告集」前書きより)

里地ネットワークは、環境庁(現環境省、以下同)の環境基本計画に盛り込まれた「里地自然地域」の保全をどのようにしてゆくかを探るために、環境庁里地研究会が呼びかけ、産官学市民が設立したネットワーク組織です。

21世紀の里地自然地域はどのように保全することができるのか。

持続可能社会とはどの方向に向いているのか。

どのような考え方、検討方法、技術や智恵を活かせば半

歩前進することができるのか。

研究や議論を重ねることから方向性を導く方法ではなく、里地での実践結果(地域住民による実施とその後の持続性及び評価)をもとに、実現可能な理念や技術、手法や智恵を、探し求めている組織です。里地で暮らす人々が導入可能な、身の丈にあった技術や方法を地域リーダーにわかる形、見える形に加工し提供すること。そして、その広報を全国的に行うことで、一つでも多くの地域が、半歩先に歩き出すきっかけと糸口を掴んでもらいたいと願っています。

このセミナー報告集は、里地ネットワークを設立した直後の平成10年2月から平成11年11月までの18カ月間に開催したセミナーの内容を一冊にまとめたものです。設立当初に開催したということの意味は、3つあります。

第一番目の意味は、里地ネットワークという組織として、全国各地で実施されているさまざまな理念や技術、手法や智恵を、実践されている方から生の声でお聞きしたかったこと。その生の声をお聞きかせいただくことで、これから開始する人々はどういうにすれば実施できるのかを、実践者に直接お伺する場を設けたかったため。

第二番目は、里地通信を通じて、セミナー内容をお伝えすることで、当日は参加できなかった会員の方も、セミナー内容をご確認いただき、その内容が直接的に必要な場合に事務局にご一報いただけるようにするため。

第三番目に、どの方法がどのような地域で有効なのかを事務局で把握させていただきかけたためです。

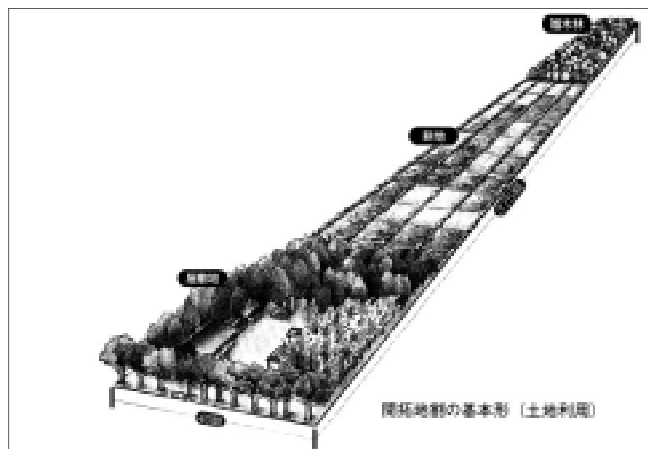
平成13年2月、里地ネットワークは、丸3年を迎えました。と同時に設立当初から会員としてご登録いただいていた方の割合が大変に多くなってきました。この報告集は、セミナーに参加できなかった会員の方々に、里地ネットワークがどのような経過をたどって来ているのか、大切にしている理念や技術とは何かを、共有していただくために、編集発行したものです。

第一回目のセミナー開催から速いもので3年の歳月が流れています。この間、時代は急激に変化し、この報告集に収めさせていただいた資料の中には、時代遅れになってしまったものも多くあります。講師の方々、会員の方々には、多大なるご迷惑をおかけいたしますが、編集の趣旨をご理解いただき、ご活用いただければ幸いです。

第10回目イオングループ里山保全活動

緑の三富再発見!

平成12年2月17日～18日
 (実行委員会共同行動日)
 埼玉県西部の三芳町・所沢市、川越市、
 狭山市にまたがる武蔵野地



首都・東京から30km圏に位置する埼玉県西部の「三富新田」。首都圏に位置する地域で、これほどまでに、色濃く木々の緑が残っているのは、この地以外にありません。

昔は、農村生活や農業に欠かせなかったこの緑が、今や農業だけでなく、首都圏で暮らすすべての人々や動物たちにとっても、欠かすことのできない自然環境になっています。しかし近年、この緑も工場・住宅・廃棄物処理場などにかわったり、ゴミ捨て場の代わりになっていたりして、少なくなっています。

今ある三富の緑を守っていくことが、ここで暮らす動物や、新世紀を担う子どもたちにも必要ではないか、そして、私たちの食と農と環境を守るためにも、不可欠なことなのではないか。そういった強い“思い”を持ち、三富とその周辺で緑の保全を願うすべての人々が一堂に集まるのが大切と考えました。

第10回目のイオングループ里山保全活動は、「三富」の保全活動の輪を地域へ広げるために、「緑の三富再発見」実行委員会の設立を呼びかけ、参加いただいた団体が、お互いにそれぞれの活動に参加し、地図づくりワークショップで各団体の情報を共有する取り組みを行いました。今回の保全活動は、「緑の三富再発見！」実行委員会加盟団体の2月の活動の中で、それぞれ取り組みが行われました。今回組織された「緑の三富再発見！」実行委員会は、今後も継続的に、本当の意味での「里地・里山の保全と持続可能な社会づくり」に向けて、様々な取り組みを検討がされていくことになっています。

三富新田とは

埼玉県西部の三芳町・所沢市、川越市、狭山市にまたがる武蔵野台地上に広がる地域を、三富新田(上富・中富・下富)地域と呼んでいます。

三富地域は、江戸時代の新田開発期につくられた農村で、その地割は農家・農地・やま(平地林)の3つに区切られ、農家1戸の敷地(約5ha)は短冊状になっています(図)。

現在、一部は関越自動車道によって分断されていますが、短冊状の地割りはいまでも見ることができます。

参考文献：犬井正著『人と緑の文化誌』三芳町教育委員会(1993)

緑の三富再発見! あそぼう・食べよう・守ろう

日時:平成13年2月17日午前

場所:くぬぎ山

内容:「オオタカが棲息するくぬぎ山、雑木林のゴミ拾い、林床整備、雑木林内の自然観察」

ドラム缶窯でピザ、竹の棒でバウムクーヘンに挑戦!地元野菜で美味しい豚汁!

案内:おたかの森トラスト、獨協大学経済地理学研究室

相続などが生じ農家が手放したヤマは、利用されないで放置され荒れていたり、ラブホテル、霊園、資材置き場、産業廃棄物処理場などになっていることが多いのです。道路から少し入った所にあり、ヤマで隠されていてあまり



目立ちませんが、人通りの少ない荒れたヤマは、防犯・防火上の問題だけでなく、不用の土石類や廃材、粗大ゴミ、危険物等をトラック等で不法に捨てにくる者が増加するなど環境保全上の問題も深刻化しています。

このような状況の中、おたかの森トラストでは、定期的にゴミ拾いを行っています。定期的に行われているくぬぎ山でのゴミ拾いから見てくるものを探りました。

集合場所の「くぬぎ山」バス停に集った人約80名。緑の三富再発見実行委員会を組織している団体のメンバーのほか、近隣の市町村から一般の人の参加が得られました。

参加者を10グループほどに分け、用意されたくぬぎ山周辺のルートマップを頼りに、グループ単位でのゴミ拾いの始まりです。

くぬぎ山周辺のヤマは、所沢市、狭山市、川越市、三芳町と4つもの市町が入り組んでいます。それぞれゴミの分別収集の仕方が異なります。今回のゴミ収集は複数の自治体をお願いすることになっているので、どこにでも対応できるように、以下の3つにわけました。

燃えるゴミ = 紙類

燃やせないゴミ = 塩化ビニルが含まれていそうなもの、燃えないもの

資源ゴミ = 缶・ビン類

拾ったゴミが袋いっぱいになると、ゴミ収集車が入れる所まで運びまとめて置き、地図にその場所を記入して行きます。

空き缶・ビンを始め、建設廃材、家電製品、雑誌が大量にやぶかれて捨てられていたり、剪定した大量の枝、趣味や仕事道具の類まで様々なものが不法投棄されています。

2時間ほどのゴミ拾いでしたが、用意した数百枚のゴミ袋が、ゴミでいっぱいになっていきました。

おたかの森トラストの方々の話によると、不法投棄されたゴミを放置したままにしておく、さらに次から次へとゴミが投棄されていくそうです。イタチゴッコのようなところもありますが、定期的にゴミ拾いをしていくことで、ヤマの所有者の方々から信頼されるようになり、ヤマの保全活動をするための林を貸してもらえるようになりつつあるそうです。ヤマの保全活動を広げていく上で、ヤマのゴミ拾いは重要な活動となっています。

昼食は、おたかの森トラストの活動拠点で地元農家産のにんじん、里芋などの野菜をたっぷり利用した豚汁。そして獨協大学経済地理学研究室の学生によるドラム缶釜でのピザ焼きと竹を利用したバウムクーヘン作りが行われました。ここで使われる薪や竹は、おたかの森トラストのヤマの手入れ活動の中で伐られてきたものです。

ピザは、生地の上にピザソースを塗り、ピーマン、たまねぎ、サラミ、チーズを載せ、釜の中へ入れて、待つこと10分ほど。とろっととけたチーズが載った、カリカリ・ピザのできあがりです。

バウムクーヘンは、ホットケーキミックスを牛乳で溶いた生地を3人がかりで焼き上げていきます。2人がそれぞれ竹の両端を持ち、ゆっくりとまわしていきます。残る1人は回っている竹の上に少しずつ生地を垂らしていきます。まわしていくスピード、垂らしていく生地の量、薪の火加減のバランスをとるのが難しい。均等に膨れて行くことはなく、見るからに不恰好です。まわりからは、もっと早くまわせ、いやもっと遅くたらせ、火が弱い、などと茶々が入ります。そんな不恰好なバウムクーヘンを見て「こりゃ、バウム・食べへん、だな」と指導教授からの野次が飛び交うなど、一生懸命焼いている学生は大変でしたが、なごやかな雰囲気の中、森の中での活動を楽しむことができました。

ふだん環境保全活動などに興味を抱いていない人でも、ヤマに集い、あそんで、たべてということを楽しむことから、ヤマの仕組みを学び、そこから興味をもって活動への参加へ導くために、さまざまなアイデアが実践されることが大切であることを学びました。

緑の三富の魅力を語り合う会 保全のための「魅力あるマップ」づくり ワークショップ

日時:平成13年2月17日午後

場所:埼玉県狭山市・赤坂の森公園「管理事務所」

2月17日午後・地図づくりワークショップ

緑の三富再発見実行委員会に参加している各団体の情報を共有するために、それぞれの活動を1枚の地図に落とし込むワークショップをおこないました。

三富地域は、所沢市、川越市、狭山市、三芳町、大井町にもおよぶ行政の狭間にあり、縮尺の大きい地図をつなぎあわせることは、意外に労力を要することでした。

1万分の1の地図で畳3畳ほどの大きさになりましたが、まずは三富地域の位置の確認をしました。続いて、鉄道の確認をしていきました。すると、どの鉄道からも離れていることが見えてきました。逆に、高速道路のインターチェンジからは近いということを確認しました。この立地条件により、住宅街というよりも倉庫、工場などの需要があることが推察できました。

そして、今度は活動団体の場所を地図に記入していきます。ここで土地利用が分かるように色塗り作業を行いました。しかし、ここまでくると、各団体からより具体的な土地利用をつくりたいとの要望がでて、2500分の1の地図での作業となりました。

午前中にゴミ拾いを行ったくぬぎ山のルートマップを転記する作業が行われました。

また、江戸時代の短冊型地割りを今も残す、三富落ち葉野菜研究グループからは、自分の家の地割の中の土地利用図の作成に取り組み始めました。また、季節ごとに土地利用や農作業も異なるということから、農業の暦づくりにも着手しはじめました。

まだ、地図づくりは情報の蓄積をはじめたところです。どのような形態の地図になるかもまだ決まっていません。しかし、地図づくりを通して、その成果をこの地域住民へ示すことによって緑の三富再発見実行委員会の目的を達成させるため、引き続き取り組みを行う場を持つことが確認されました。

地図づくりワークショップ終了後には、三富落ち葉野菜研究グループ、武蔵野に学ぶ会の農家がつくったサツマイ

モ、サトイモ、ほうれん草、にんじん、うど、白菜など野



菜即売が行われました。ワークショップを通じてお互いに親しみを感じた参加者は、こぞって野菜を買い求めていきました。また、翌日のデモンストレーション用の八本につめた落ち葉が販売場所横に置かれ、そして、それぞれのグループが行う翌日の活動を促すのに貢献したようです。

武蔵野に学ぶ会

活動日:平成13年2月18日

場所:埼玉県所沢市下富・通称くぬぎ山

ヤマでの間伐は、燃料として価値のあるクヌギやコナラなど堅い木を残すように行われます。そして、間伐の後は下刈りです。低木類や草木類を刈り払います。これを長年にわたり定期的に繰り返す循環システムによって、落ち葉が掃けるヤマが維持されてきました。

燃料としての価値がなくなったヤマは、農家自身も手入れをしないことが多くなったり、不動産として転売されその後放置されてしまっている例も少なくありません。4、5年も放置されていると、低木や草木類が生い茂り、蔓の類が木にからみついている、ジャングルようになってしまい、ヤマの中に入ることも一苦労です。

武蔵野に学ぶ会のメンバーは、このような地域外に住む所有者の荒れたヤマの手入れにも今年から着手し始めました。このヤマから落ち葉を採取し、堆肥として安全で美味しい野菜を農家の方々と一緒に作り、食べようという試みです。

この日の参加者は主婦や年配の方を中心に20名ほど。これまで落ち葉掃きをしてきたヤマとの大きな違いに、みんな驚いています。まずは、鎌やノコギリで低木や草木、蔓

などを切っていく、作業場所の確保ができたところで、枯れたアカマツや、古倒木の処理を行っていく、だんだん落ち葉が掃きやすい状態になってきました。

堆肥をつくるための落ち葉掃きの楽しみだけでなく、ここへ来て花見ができるようにヤマザクラは意識的に多く残しました。ヤマザクラの花を楽しみにひとりでも多くの人にこのヤマに足を運んでもらえるように、そして花見がたのしめる素敵な場所にゴミを不法投棄しないで、という願いが込められています。

この日の作業は5時間ほど。小面積ではありますがヤマはすっきりし、落ち葉も掃くことができるようになりました。消費者も生産者も一緒に汗を流して手入れしたヤマから得た落ち葉を利用して堆肥づくりをし、その堆肥を使って野菜が栽培が行われます。

■ 三富落ち葉野菜研究グループ

活動日:平成13年2月4日、2月18日
場所 埼玉県入間郡三芳町上富

開拓から300年の歴史がある上富地区では、ヤマと畑が密接に結びついた循環型農業を今も引き継がれています。特に、落ち葉を利用して苗床を作って栽培されるサツマイモは、三富の特産物として人気があります。

この循環型農業を消費者に多く知ってもらおうと、数年前から30代の若手農家のグループが落ち葉掃き体験を毎年1~2月にかけて数回行っていきます。

2月4日の落ち葉掃き体験に集まった参加者は40名程。小学生からお年寄りまで幅広い年齢構成です。毎年落ち葉掃きを体験しにくる常連さんもたくさんいます。

長年の循環型農業の継続と、事前に農家の方々によって下刈りが行われていたため、適度な間隔に木が生えていて、落ち葉が掃きやすいコンディションとなっています。落ち葉掃きをするのに使う道具は、「熊手」と「八本バサミ」と呼ばれる大きな竹籠。熊手で掻いた落ち葉をこの「八本バサミ」に詰め込んで、農家の庭の一角に設けられた苗床へ運んでいきます。八本バサミはおよそ直径70cm、高さ80cmです。竹籠の底を編んである竹の骨数で区別しています。

落ち葉掃きをするには帽子とマスクが必需品です。カサカサに乾いている落ち葉を掃くと頭のてっぺんから土ぼこりがかぶりますので、マスクがないと鼻の中までほこりで真っ黒になってしまいます。

そして、実際に落ち葉掃きのはじまりです。掃く範囲を

少しずつ決めて、みなでいっせいに掃いていきます。ある程度落ち葉が集まると、八本バサミにつめていきます。八本バサミは木のすぐ横に置かれます。これは口付近まで落ち葉が詰まると、詰めた落ち葉を踏み込むのですが、その時に木の幹につかまりバランスをとって踏み込んでいきます。この踏み込む作業は子ども達に大人気で1つの八本バサミに3、4人が上がってキャーキャーいながら踏み込んでいます。

落ち葉が詰め込まれた八本バサミは、大人が2人がかりでやっと持ち上げることができるくらいの重さになります。ヤマの中での移動は、八本バサミを横倒しにして、転がしていきます。まんまるではなく、四角い籠の角がとれたような形なので、玉転がしのように転がりません。最初に転がすまでは少々力が必要ですが、一度ゴロンッと転がしてしまえば、起きあがってきた所をポンッと手で突くとまた一回りしてくれます。この繰り返しで転がしていきます。この八本バサミは、農家の堆肥置き場または苗床施設へ運びます。そこで八本バサミから落ち葉を掻き出します。苗床施設では50~60cmの高さに敷き詰めていくので、足下がふらつくのと、八本バサミの重さで、なかなか思うように体を動かすことができず大変です。後日この敷き詰めた落ち葉に水をまきながら踏み込み苗床のできあがりです。3月中旬頃にサツマイモの苗づくりの伏せ込みが行われます。

ここの落ち葉掃き体験の魅力はなんといっても、落ち葉堆肥をたっぷり使って栽培されたサツマイモ、里芋、にんじんなどの野菜をヤマの中で味わえることです。昼食の時には、里芋、にんじんなどがたっぷりに入った豚汁。そして、3時の休憩の時には、サツマイモの天ぷらをごちそうになりました。サツマイモの種類は現在広く市場に出回っている「金時」ではなく、「紅赤」という品種で、三富では多く栽培されています。天ぷらにするとホクホクとしてとてもおいしいのです。落ち葉掃きを体験し、ヤマの中で三富で作られた野菜を味わっていると、参加者自身も循環型農業の一翼を担っているような感じになってくるという声も聞かれました。

落ち葉掃き終了後は、ヤマ畑 屋敷地と続く短冊型地割りを確認しながら歩きました。ヤマのもっている保水機能、隣の畑との境の畔にはお茶やつげなどが植えられていること、収穫したサツマイモの蔓などが畑に意識的に置かれていること、屋敷地の建物の配置や木々の種類などの説明を受け、三富の循環型農業システムについて学ぶことができました。

■ おおたかの森トラスト

活動日:平成13年2月18日他、このグループの活動は毎日のように行われている。

場所:三富全域

新たな炭利用による循環システム

おおたかの森トラストでは、炭の新たな活用法に取り組み、ヤマの燃料利用以外での価値を見出しています。そこには新たな人とヤマの循環システムが築かれつつあります。

従来のヤマの手入れで得られる木々のほか、松枯れしたアカマツを焼いて炭にしています。そして汚れの目立つ川に投入し、川の浄化、そして一定期間の後に引き上げたものを検査した上、問題がなければ炭を粉にして土壌改良材として畑に入れていきます。荒れたヤマを引き立たせていたアカマツを処理することにより、松枯れの被害が広がるのを抑え、しかも炭にすることによってさらに水質浄化や土壌改良材として利用する仕組みを築いています。

荒れているのは、ヤマだけではありません。利用価値が忘れられつつある竹林も手入れがされずに荒れてしまっています。成長の早い竹は手入れをしていかないと短い期間

で密林になり荒れた状態に陥ってしまいます。

実はこの竹、炭にするといろいろと使い道があるのです。竹炭の評価は高く様々な用途として需要があります。飲料水や風呂水などの水質改善、おいしくご飯を炊くために炊飯利用、室内浄化や燃料などなど。しかも炭焼き時にできる竹酢液も需要があります。これら竹炭を生産して、竹炭、竹酢液を販売することで保全活動をするためのヤマの購入資金や資材購入資金しを創出につながっています。

緑の三富実行委員会の取り組みの中では、農家やお茶屋さん所有の竹林の手入れと竹を炭材にした炭焼きが行われました。

竹林の伐採はノコギリでも根本から容易に切倒していけます。切倒した竹は3～6カ月間乾燥させたのち炭焼きが行われます。活用できる用途があれば成長の早い竹は宝物に変身です。しかも竹は同じような形、大きさも一様で、重量も木に比べると軽く、運ぶのも容易です。竹は炭焼きをしなくても、子どもの遊び道具や生活用具などの資材としても加工して楽しむこともできます。

余暇活動の一環としてヤマや竹林の手入れが行われていき、結果として市民が余暇を楽しみ、環境保全も行われ、さらに活動資金も創出できる形が、人とヤマ・竹林との新しい循環システムです。そのモデルがここにあります。



第11回目イオングループ里山保全活動

里地・自然エネルギー学校

平成12年3月24日～25日
埼玉県小川町
小川町自然エネルギー研究会



今回の里地・里山保全活動のテーマは「自然エネルギー」です。

太陽の光、植物の力、微生物の力を借りて、使う人が作り、メンテナンスもできる等身大のエネルギーについて体験しようという企画です。埼玉県小川町の「小川町自然エネルギー研究会」に、全国各地から、地域づくりを実践する人たちが集まりました。

小川町自然エネルギー研究会

最初に見学したのは、有機農業の世界では知らない人がいない金子美登さんの霜里農場です。金子さんは、「有機」という言葉がまだほとんど知られていなかった1970年から有機農業に取り組みを続けてきました。少しずつ回りに理解者があらわれ、また、金子さんのもとで有機農業を学んだ人が小川町に定住したりして、現在は約20世帯が小川町有機農業生産グループをつくり、それぞれ有機農業を続けています。

1991年、桑原衛さんが代表を務めるバイオガスキャラバンの国内プラント第一号が小川町の田下隆一さんの農場に建設されます。さらに、1998年には太陽光発電を推進し、自然エネルギー事業協同組合レクスタの専務理事でもあった桜井薫さんが小川町に移り住みます。有機農業と自然エネルギーは、そもそもの発想が同じところにあります。1996年、小川町自然エネルギー研究会が小川町の有機農家、学校の先生や職人、芸術家、そして、自然エネルギーに詳しい人たちを中心に発足したのも自然な流れでしょう。

現在は、「自然エネルギー学校」を毎年開催しています。この学校は、理論ではなく、実際に技術を身につけ、かつ、教える人は、太陽光発電やバイオガスなどの設備が、学校

を通じて手に入るというしくみです。毎年、全国から参加者が集まり、毎回20人から60人ぐらいの規模で、バイオガスの設置やガラス温室建設、炭焼きや稲藁の利用方法などの講習会が開かれています。テーマとしては、このほか、太陽光発電、廃食油燃料などがあります。

また、地域ぐるみの取り組みとして、小川町とともに、ふたつの自然エネルギー活用地域づくりを検討しています。ひとつは、生ごみなどからメタンガスと有機肥料を生む「ぶくぶくプラン」で、もうひとつは、廃食油をディーゼル燃料にし、かつ、遊休農地で菜の花を栽培し、菜種油をとろう、そして、里山の景観保全もしようという「菜の花プラン」です。この計画は、環境省の地球温暖化対策実証実験地域予備調査事業として、2000年3月、環境庁(現、環境省)に提出したものです。

霜里農場見学

霜里農場には、有機農業を学ぶ人が住み込みで研修にきます。1年間かけて有機農業の基本を学び、全国、全世界に散っていきます。見学したときも数名の若い研修者が、仕事を続けていました。

霜里農場は、田んぼ1.5ヘクタール、畑1.3ヘクタール、山林1.7ヘクタール、乳牛2頭、鶏200羽で、米、麦のほか、野菜を年間80品目栽培しています。そして、60km圏内に住む人たちと、各家庭ごとに直接提携しています。

1年中見学希望が押し寄せるため、月に1日、見学日をもうけています。今回も、この見学日に合わせ、他の見学者とともに農場を回りながら金子さんが説明してもらいます。ただ、今回は、「自然エネルギー」がテーマなので、そこに力点を置いての説明です。



左：バイオガスプラントの一部 右：太陽発電で電牧欄

霜里農場には、太陽光発電設備とバイオガス設備があります。牛がいるためバイオガスのもとになる「糞」は手に入ります。できたガスは火力として使用し、ガスを生む過程でできる液肥は、霜里農場の野菜作りに使われます。農場の中で作物と肥料の循環だけでなく、エネルギーとしての循環もそこに加わっています。

太陽光は2つの設備があり、ひとつはバイオガスやハウスの補助用に使われ、もうひとつは、合鴨の電牧欄に使われています。電牧欄は、弱い電力でかまわないため小さな太陽光発電パネルと小さなバッテリーだけです。

また、廃油トラクターもあり、近づくとも天ぷら油のにおいがするそうです。今回は時間の都合でそのにおいを体験できず、残念でした。

霜里農場と小川町の有機農業については、一言で表現することはできません。今回は自然エネルギーについてですが、有機農業そのものが自然エネルギーの有効な活用技術のかたまりです。

小川町の有機農業については、小川町有機農業生産グループによる『おがわまちの有機農業』という小冊子があります。一度、見学してみたいかがでしょうか。

小川町有機農業生産グループ

〒355-0323 埼玉県比企郡小川町下里809

バイオガス

有機物の発酵によって、家庭用や動力用の燃料となるバイオガスを生産し、かつ、肥料効果が高く、土壌改良や病害虫防除効果があるバイオガス液肥をつくる技術です。

バイオガスの熱量は、1立方メートルあたり5,500~6,500kcalとなり、商業エネルギーなみの良質なガスです。こ

の技術は、とくに発展途上国の農村で家畜がいて、自給的な農業を行っている場合、肥料と燃料が自給でき、循環できることから受け入れられています。家庭用バイオガス施設は、中国で500万基、インドで126万基、ネパールで6万基(いずれも1991年時点)となっています。詳細は、『農業技術体系』(農文協)をご覧ください。

バイオガスキャラバン事務局

〒355-0334 埼玉県比企郡小川町大字笠原227

太陽光発電

太陽光発電には、大きく独立系と系統連系があります。系統連系とは、電力会社の電力と連動していて、家庭の中などで、購入電力の一部を太陽光発電におきかえるという発想です。独立系は、電気のきていない畑や山、海の上など、これまで電気のなかったところで電気が作り出せ、活用できるという意味を持ちます。自然エネルギーとして、独立系にはより多くの可能性があります。

今回の見学でも、電牧欄への利用や農場での補助的使用などを見ることができました。また、水を引くポンプの電力や、畑に散布するための電力などにも活用できます。海外であれば、電力のない地域で、部屋の中に明かりを持ち込めるという強みがあります。

動力部分がないので、バッテリーを使用しても、メンテナンスが比較的簡単だという特色があり、インドネシアの農村地域などでは、NGOなどによる普及活動が行われているそうです。

ワークショップ「小屋をつくらう」

25日のテーマはふたつ。ひとつは、移動式かわら屋をつくることです。釘を1本も使わず、木組みと、紐だけで小屋をつくる技術で、組み立て2時間、撤去2時間だとか。かつて日本にあった技術で、かわらの番屋として使い、雨で水かさが増すとすぐに撤去して、水が引いたらまた組み立てて使ったそうです。ここで私たちが学ぶのは、間伐材の有効利用や、木組みという技術、そして、もうひとつ、柿渋という技術です(後述)。さて、この小屋のどこが自然エネルギーなのでしょう。

小川町自然エネルギー学校の「自然エネルギー」には、藁や間伐材など、農業や林業資材を有効に活用し、使い終わったら、ふたたび地域の中で資源の循環として利用するという伝統的な技術も含まれているからです。たとえば、草鞋(わらじ)や、筵(むしろ)づくりなどもそのひとつ。

燃料、動力源だけがエネルギーではありません。地域の自然から得たものを生活の中で使用し、また、自然のサイクルに循環させることがすべての基本なのです。

もうひとつは、木質バイオマスエネルギー利用のひとつとして、ペレットストーブのデモンストレーションです。ペレットは、間伐材、剪定枝、パークなどを利用し、それを小さく粒状に成形した木質燃料です。圧縮成型することで、長期保存、輸送、安定的な熱出力ができます。スウェーデンで使用がはじまり、地域暖房施設や家庭施設として導入されています。今回は、スウェーデンから輸入したペレットストーブのデモンストレーションと、その点火用電力を供給する太陽光システムのデモンストレーションを、小屋をつくる横で体験しました。

小屋づくりについては、参加者全員が、楽しく、あれやこれや、時には間違いながら、なんとか作った、とだけ書いておきます。時間は、正味6時間でした。でも、きっと慣れると2時間でできるでしょう。きっと。そう信じます。たぶん...

ただ、子どもでも手伝えることがある作業です。木組みのための材木の加工さえきちんとできていて、体験者がひとりでもいれば、それほど難しい作業ではありません。

ひとつだけエピソードをご紹介します。

途中、壁用の板に紐を通すため、木に穴を開けていく作業をしていました。充電式のドリルを使用していたのですが、予想よりも早くバッテリーが切れてしまい、困った、どうしようというとき、みんなの目が、隣で、木質ペレットストーブの点火スイッチ用電力としてデモンストレーションしていた太陽光発電と、大きなバッテリー、インバーターの組み合わせに集まりました。「これで充電できる」。たしかに充電でき、作業は無事に終了。畑地、山間での太陽光発電のありがたみを実感した一瞬でした。

今回の参加者の中には、日本各地で地域づくりに取り組む人や、海外青年協力隊、海外支援NGOスタッフなどがいて、すべての取り組みが真剣に受け止められていました。この技術は、日本国内、国外をとわず、里地づくり、地域循環型社会づくりに大きなインパクトを与えるという印象を強くしました。

小川町と、有機農業、自然エネルギーに関わる人たちについては、とにかく、年齢に関係なく、元気で明るくて前向きでパワフルです。「なにか楽しいことを地域でやろう」エネルギーをたっぷり浴びた2日間でした。



上3枚は、「建設」風景。一番下は、防水などを目的とした柿渋ぬり。

里地ネットワーク推薦書籍のご案内

里地・自然観察関連

『ケビンの里山自然観察記』

【著】ケビン・ショート【版元】講談社(1995年9月出版)

203p、1650円+税

第1章 ケビン、里山ナチュラルリストになる

第2章 里山の四季

第3章 ナチュラルリストになるための実践講座

第4章 里山自然の保護のために

『ケビンの観察記 海辺の仲間たち』

【文・写真・イラスト】ケビン・ショート【編】講談社インターナショナル【版元】講談社(1999年6月出版)221p、1700円+税

イラスト、写真350点余収載。NHK、民放テレビでおなじみの自然観察の達人が、身近だけど不思議な世界をウォッチング。

1章 ようこそ海辺へ

2章 干潟 どんこの楽園

3章 磯の世界はマイクロ・ハビタット

4章 砂浜 生き物には過酷な世界

5章 コーストウォッチング入門

6章 日本の海辺自然の保護のために

『日本の四季と暮らし』

【著】市川健夫【版元】古今書院(1993年1月出版)178p、1942円+税

春(早春賦; 弥生月; 彼岸のころ; 春爛漫 ほか)

夏(端午の節供; 新緑の季節; 山菜採り; 梅雨ほか)

秋(残暑の候; 台風季節; 仲秋の名月; 実りの秋ほか)

冬(冬ごもり; 狩猟の季節; スキーの季節; 師走ほか)

地域づくり関連

『地域づくり 創造への歩み』

【著】宮口としみち【版元】古今書院(2000年6月出版)

210p、2200円+税

地域づくりとは時代にふさわしい新しい価値を地域から作り出すこと。

「21世紀の国土のグランドデザイン」において多自然居住を提唱する著者が、地域づくりの真髄と地域リーダーたちとの出会いを語る。

第1章 自然との共生

第2章 伝統と遺産を活かす

第3章 交流と連携がつくる価値

第4章 挑戦と創造

第5章 異国の風景から

補章 多自然居住の提唱と創造

『現代農業2000年11月増刊 日本的グリーンツーリズムのすすめ ~農のある余暇~』

【編】【版元】(社)農山漁村文化協会、257p、900円(税込み)

<http://www.ruralnet.or.jp/zoukan/index.html>

「人生を耕す“農”のある宿 自分探し、仲間づくり、自然な暮らしの拠り所」

「これからは“何も無い田舎”が面白い その村を楽しむ術をもつ多くの人がいる」

「子どもたちに豊かな原風景と原体験を」

「日本のグリーンツーリズム 21世紀の可能性 本当の豊かさは、黄金色でなく緑色」

の4部構成で、日本グリーンツーリズムの新段階を明らかに。ここに来れば金はなくても愉快にぜいたくに暮らせる知恵や技が学べるぞ! 田んぼや畑だけでなく、山や川、海などとまるごと結びついた暮らしを村の人と都市の人とがともに取り戻し、新しい暮らしをつくる。

『21世紀の日本を考える』第11号(2000年11月)

特集:中山間地域に人を呼び込むには

【編】「21世紀の日本と農業・農村を考えるための行動」事務局

【版元】(社)農山漁村文化協会、88p、400円(税込み)

<http://www.ruralnet.or.jp/move21/index.html>

ごみ関連

『BOOK GUIDE ゴミと暮らしの戦後50年史』
【著】市橋 貴【版元】リサイクル文化社・星雲社(発売)
(2000年5月出版) 207p、1600円+税
戦後が分かると、21世紀が見える。ゴミ問題関連図書113冊収録。「環境」の明日を読むベーシック・テキスト集。出来事・新登場/流行年表、解説付き図表62点掲載。

地元学関連

『風に聞け、土に着け【風と土の地元学】』
【著】地元学協会事務局・吉本哲郎【版元】地元学協会事務局(2000年出版)1000円

- (1) 地元学とは
- (2) 地元学の目的
- (3) 土の地元学の作法
- (4) 風の地元学の作法
- (5) 地元学事始め

問い合わせ：地元学協会事務局

TEL：0966-67-1659 FAX：0966-67-1669

email：lsm@orange.ocn.ne.jp

『現代農業5月号増刊 地域から変わる日本
～地元学とは何か?～』

【版元】(社)農山漁村文化協会、256p、900円(税込み)
<http://www.ruralnet.or.jp/zoukan/index.html>

- 「わか地元学」
- 「水俣はいま、楽しく、元気いっぱいです」
- 「自根キュウリ、けんか七夕太鼓の地元楽」
- 「県が応援“いわて地元学”の実践」
- 「職員(風)も研修受け入れ地域(土)も元気が出てきた！」
- 「出会い、驚き、ああそうかと思うことから始まる」
- 「結いする地元学のこころ」
- 「地元学との出会いが人生まで変えた！」
- 「共生と循環の地域づくりの心を育む ～地元学からまち・むらづくり計画へ～」
- 「生活文化創造の場として庭、そして景観」
- 「“馬”に傾く私の地元学」

- 「ぼくらは里地たんけん隊」
- 「近代公教育とわが村の“郷学”」
- 「琵琶湖生まれの“生活世界の環境学”」
- 「自治公民館の生活文化祭から手づくりほんものセンターへ」
- 「蔵のものをぼちぼち出したら1村100品1億円」
- 「“寝るだけの地域”から“暮らす地域”のありがたさ」
- 「ともに育る植物とともに“つながり”豊かな農園を」
- 「調べてわかった山里・葉山のすごさ」

里地ネットワークの書籍・近刊のご案内

里地ネットワーク会員の皆さんには、今号あるいは次号の発送時に同封します。

『里地・里山であそぼう

～里地・里山保全ノウハウ集 Vol.1』

【編著】(財)イオングループ環境財団・里地ネットワーク【版元】里地ネットワーク(2001年4月出版)96p、300円(税込み)

(財)イオングループ環境財団と里地ネットワークは、1999年より3年間、全国20カ所の里地・里山保全活動を行っています。この保全活動の前半10回分の内容と保全のための技法やノウハウを集めたガイドブックです。北海道から島根県まで、まったく異なった風土と文化をもった土地で、その土地固有の課題を背景に保全活動を行いました。全国各地で行われて保全活動に、いくつかのヒントを提供できることを願って書籍にしました。

『里地セミナー レポート集』

【編著】里地ネットワーク【版元】里地ネットワーク(2001年5月出版予定)111p、1000円(税込み)

これまでに行ってきた「里地セミナー」をまとめました。里地づくりのための理念、手法がたくさんあります。

このコーナーでは、みなさん推薦の書籍を募集しています。このコーナー要領に簡単なコメントをつけて事務局までお寄せください。

イベント・セミナーご案内

北海道体験学校NEOS

北海道のフィールドで、四季折々の様々なプログラムにより、人と自然、人と人との豊かな出会いをつくり、持続可能な地球社会の推進に取り組んでいます。黒松内町、東川町などで自然学校を運営し地域振興の一翼を。

大人のための地球倶楽部

例)「ナチュラルな土曜日～遊ぶ・癒す・暮す～」

子供のためのイエティくらぶ

例) イエティ黒松内校(毎月第2土曜日)

各種自然案内人の養成プログラム

問合せ:北海道自然体験学校NEOS

TEL:011-520-2066 FAX:011-520-2067

<http://www.neos.gr.jp/>

地球デザインスクール

4月 山菜と健康茶教室

講師予定:奥波見の山崎さん、森林保全課の吉田さん

5月 森のインテリア教室

講師予定:京都造形芸術大学の普和先生を予定。

6月 土の炭窯づくり教室

講師予定:地元中波見の炭焼き名人の面々。

7月 森のシンポジウム(7月8日開催決定)

講師予定:中川重年氏、ナチュラルステップジャパンのレイナ氏

問合せ:地球デザインスクール事務局

TEL:075-417-3147 FAX:075-431-8376

<http://www02.so-net.ne.jp/earth-d/>

「水俣まちめぐり」ガイドツアー

公害の原点・水俣を訪れる方々に対して、相思社では有料で水俣まちめぐりや環境・公害学習のお手伝いなどを行っています。ご希望によりご案内のコースづくりなどもお手伝いしています。マニュアルがあって、その通りに話すのではありません。個々の職員の知識と経験と感性でご案内します。相思社に宿泊することや、2日以上にわたってご案内することも可能です。個人や小グループだけでなく、修学旅行・校外学習・社会科見学のプランニング・コーディネート、バスの添乗(案内・説明)も行っております。

問合せ:水俣病センター相思社

TEL:0966-63-5800 FAX:0966-63-5808

<http://www.fsinet.or.jp/~soshisha/>

(財)キープ協会

第15回清里インタープリターズキャンプ

期日:5月3日(木・祝)～6日(日)[3泊4日]

第6回自然と遊び、牛を飼うたいけんキャンプ

「梅雨の中でも牛たちは元気!」

期日:6月23日(土)～24日(日)[1泊2日]

第30回森を育てる週末実習隊

「5m×5mの清里高原復元計画」

期日:6月9日(土)～10日(日)[1泊2日]

問合せ:キープ・フォレストーズ・スクール

TEL:0551-48-3795 FAX:0551-48-3228

http://www.sannichi-ybs.co.jp/KEEP/keep_top.htm

国際ワークキャンプセンター

日の出NICEな森&畑(東京都日の出町)

月1～2回。地主のご好意で借りた、荒れた山林を自由に再生する。地主が高齢で手入れできない竹林を間伐、炭焼き、竹細工でエコロジカルに。

清水谷戸NICEな森&畑(神奈川県藤沢市)

「清水谷戸を愛する会」と協力。月1回。道路開発の危機にある貴重な森を保全。田んぼの再生や池堀りなど。

里山の保全(大阪府富田林市、四条畷市)

「大阪自然環境保全協会・里山クラブ」と協力。年4～5回。森林や再生や間伐、歩道づくりなど。野草料理!

野鳥公園づくり(東京都大田区)

「東京港野鳥公園グリーンボランティア」と協力。年4～5回。川のかいぼり、植樹など、鳥の住みやすい環境作り。

海ガメや渡り鳥の保護(静岡県浜松市)

「サンクチュアリ・ジャパン」と協力。年3～4回。海ガメや渡り鳥などを守るため、柵・聖域作りやパトロール。

問合せ:国際ワークキャンプセンター(略称:ナイス)

TEL:03-3358-7140

<http://www.jah.ne.jp/nice-do/>

蕪栗沼ぬまっこくらぶ

蕪栗沼とその周辺水田の湿地環境を求めて飛来する渡り鳥ガンと人との共生に対して様々な取り組みをしています。

第6回蕪栗沼探検隊の集い

日時:2001年6月2、3日

内容:虫取り、池作り、環境教育研修会、シンポジウム

問合せ:蕪栗ぬまっこくらぶ(宮城県田尻町)

TEL&FAX:0229-38-1124

<http://www2.odn.ne.jp/kgwa/kabukuri/>

エコライフフェア2001

日時:6月2日(土)・3日(日)

会場:東京都立代々木公園 園路(NHKホール前)

テーマ:「時代が変わる 私が変わる 環境世紀の幕開けです」

6月は環境月間です!環境にやさしい企業・技術展、NGOコーナー、各アトラクションを予定「エコカーワールド2001(低公害車フェア)」エコカーの展示・試乗コーナー等/「循環型社会形成推進基本法ミュージカル ごみ・で・な~いランド21」

問合せ:環境省広報室 TEL:03-3581-3351

<http://www.env.go.jp/>

牛久自然観察の森

定例のイベントとして

ガイドツアー:毎週日曜日および祝日・午後2時~3時

竹細工教室:毎月第2土曜日 午前10時~午後3時

植物観察会:奇数月の第3日曜日

バードウォッチング:毎月第2日曜日午前9時半~12時

場所:茨城県牛久市 牛久自然観察の森

問合せ:牛久自然観察の森

TEL:0298-74-6600 FAX:0298-74-6812

<http://www.net-ibaraki.ne.jp/ushiku-v/>

樹木・環境ネットワーク協会<聚(しゅう)>

様々な立場の人が世代を超えて聚(あつ)まって、知恵を出し、具体的な環境づくりに貢献する活動。

里山の保全・再生活動(ワーキング)

町田(東京都町田市) 八ヶ岳(長野県八千穂村) 岩手(岩手県川崎村) 岩倉(京都市左京区) 高尾(東京都八王子市)など。

都市と緑地との関わりを模索する活動

NGクラブ(東京都文京区) 武蔵野(東京都武蔵野市)など。

グリーンセイバー検定制度

日本の自然に培われた文化を見直し、自然と調和した社会づくりに貢献できる人を育てることを目指しています。ベイシック、アドバンス、マスターの3つのステップによって構成されています。

・ベイシック検定試験日時:2001年6月3日(日)

・アドバンス検定試験日時:2001年6月3日(日)

会場は東京と大阪で開催。申込締切は2001年5月15日(火)

問合せ:樹木・環境ネットワーク協会

Tel:03-5366-0755 Fax:03-5366-0688

<http://shu.m78.com/>

横浜自然観察の森

正規レンジャーの他ボランティアが様々な活動に主体的に参加・運営しています。

ぼかぼかのんびり森さんぽ:5月3~6日の毎日

トンボ池掘りと水辺の生物調べ:5月5日/中学生以上

春の森でおもいきり遊ぼう:5月6日/3才以上の未就学児と保護者

みどりの森の探検団:5月12日(土)/小学生と保護者

知るう・歩こう・考えよう!これからの里山・森づくり

日時:5月19日(土)/高校生以上

内容:里山をテーマにしたミニシンポとフィールドガイド

もりのボランティア説明会:6月17日(土)

内容:施設に関わる様々なボランティア活動と活動場所のご案内

場所:横浜市栄区 横浜自然観察の森

問合せ:横浜自然観察の森 TEL:045-894-7474

<http://www.kt.rim.or.jp/Ewbsjsanc/14/141yokohama.html>

KOA森林塾

4月から翌2月まで、年間15回土曜日に開催される通年の『Aコース』と夏と秋、年2回開催される短期集中型の『Bコース』。

問合せ:KOA森林塾事務局 担当:早川まで

Tel 0265-70-7065 Fax 0265-70-7994

<http://www.koanet.co.jp/forest/Index.htm>

NPO法人・フォレスト工房もくり

森林をたっぷり感じたい人のためのプロフェッショナル集団です。

山菜テッター入門合宿

日時:5月26~27日(土~日)1泊2日 場所:新潟県・奥只見

問合せ:フォレスト工房もくり TEL:0268-72-9733

<http://mokuri.cool.ne.jp/>

おおたかの森トラスト

埼玉県西部の所沢市周辺の10カ所以上の森林を購入あるいは借りて保全活動に取り組んでいます。

きのこを育ててクワガタを増やそう

日時：2001年5月3日(祝) 17日(木) 31日(木)

竹炭焼きと薪割り/川が喜ぶ炭焼き

日時：2001年5月6日、5月20日、6月3日

薪割りと炭の選別

日時：2001年5月7日、14日、21日、28日

おおたかの森のごみ拾い

日時：2001年5月10日(木) 26日(土)

問合せ:おおたかの森トラスト TEL:042-943-3448

森の惑星プロジェクト

工芸家・作家の稲本正氏、写真家の小林廉宜氏が4年をかけて世界15カ国20カ所を巡った「森の惑星」の旅。その成果を1年間かけて様々な催しで世の中に広げていきます。

その第1段が森の惑星トークショーです。

森の惑星トークショー

6月25日(月)「東西文化と森の惑星」

ゲスト：C・W・ニコル氏(作家)

6月26日(火)「地球の森、自由の森」

ゲスト：筑紫哲也氏(ニュースキャスター)

6月28日(木)「職人魂のグローバリズム」

ゲスト：永六輔氏(放送タレント)

6月29日(金)「生きものと雑木林、そして森の惑星」

ゲスト：今森光彦(写真家)

7月からは環境問題、森林のエキスパートに学ぶ森林総合講座が月1回のペースで1年間開催されます。

会場：紀伊国屋ホール(東京都新宿区)

内容：各国の森林スライド上映&講義

問合せ:森の惑星実行委員会事務局(オークビレッジ内)
TEL:03-3500-0359 FAX:03-3423-7992

「里山から考える21世紀」実行委員会

「Satoyama21 里山から考える21世紀」は、記録映像『今森光彦の里山物語』の上映をはじめ、里山に関するパネル展示やトークショーの実施などを通して、人と自然との共生を考えるプロジェクト。

『今森光彦の里山物語』上映会4月28日(土)~5月6日(日)

会場：鳥取県立氷ノ山自然ふれあい館

問い合わせ：氷ノ山自然ふれあい館(担当：田中)

TEL:0858-82-1620

6月10日(日)

会場：栃木県立博物館 講堂

問合せ：日本野鳥の会 栃木県支部(担当：岩淵)

TEL:028-625-4051

問合せ:「里山から考える21世紀」実行委員会事務局(担当:西直人) TEL:03-3475-7730 FAX:03-3475-7739

<http://www.satoyama21.com/>

里山倶楽部

森のキッチン・バウムクーヘンづくり

日時：2001年5月10日

場所：大阪府河南町

里山の学校

大阪南部・河南町の里山をフィールドとして、自然と共に暮らす知恵を、四季を通して考え、学ぶ、実践講座。

春夏編プログラム(開催中)

4月14日(土):入学式、山菜料理/5月12、13日:里山とのつきあいを学ぶ/6月9日:里山保全、下草刈り/7月14日:田んぼの草取り、半夏生餅作り/8月4日:川歩きと魚とり/9月8日:有機農業入門

秋冬編プログラム:2001年10月~2002年3月

10月13日:始業式、学校道づくり、里山のカタチを知る/11月24、25日:里山キャンプ/12月8日:楽器作りと森のキッチン、薪作り/1月12日:田おこし、伝統技術を学ぶ/2月9日:林業体験、伐採と玉切り/3月9日:炭焼き、シイタケの植菌有機農業入門

問合せ:里山倶楽部事務局(大塚)

TEL&FAX:06-6889-6096

<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/bankero/>

棚田市民支援ネットワーク

鴨川・大山千枚田田植えバスツアー

日時：5月12~13日(土~日)1泊2日

場所：千葉県鴨川市

問合せ:棚田市民支援ネットワーク

TEL&FAX:03-5261-4334

<http://www.avis.ne.jp/~ogit22/tanada.htm>

このコーナーでは、みなさんからのイベント情報を募集しています。ご事務局までお寄せください。